

【福島大学むらの大学アーカイブ 23】【南相馬 Chapter 8】

野馬追に“駆けた”半生 一当たり前だった馬との日々

相馬野馬追 元・郷大將 杉本義隆さん



インタビュー日時：2024年9月26日、11月9日

インタビュー場所：杉本さんご自宅

聞き手：高橋寧、神長滯、石井一吉、小沢駿介、前川直哉

プロフィール

昭和14（1939）年3月23日小高生まれ。

中学生の頃から相馬野馬追に参加し、小高郷の郷大將も務める。震災前の2010年に引退。

妻のミツイさん、娘の原田みゆきさんもお話を伺いました。

★震災以前の生活

ーここ（小高）でお生まれになって、小学校、中学校も小高ですか。

杉本義隆：小高。高校も小高農業高校。高校 2 年生の時に小高農工高等学校っていう名前に変わったんです。

ー親御さんは何のお仕事をなさっていたんですか。

杉本義隆：農業です。

ー作っていたのはお米ですか。

杉本義隆：米。水田を作って、あと畑のほうは養蚕のための桑畑でした。ただ、私が小学校に上がった当時は食糧難だったから、桑の間の畝に麦なんぞ作っていたようです。

ー養蚕はずっと続けておられたんですか。

杉本義隆：養蚕は私の父が脳梗塞で倒れるまで続けていました。

ー家では馬は飼っていたらっしゃいましたか。

杉本義隆：なんでかで馬がいなかったら、田んぼを耕せなかったから、農耕馬がずっといました。

ー機械ではなく、馬に鋤や鍬などですか。

杉本義隆：元は戦前の軍馬といって、1 歳の馬を、物を運んだりなんかできる 3 歳まで、国から無償で農家に貸してもらって使っていたものを、戦後払い下げてもらって農業をやっていた。私が卒業する頃まではいたな。それで馬が歳を取ったら新しい馬を買って、古い馬は業者に引き取ってもらった。

ー日本の景気が少しずつ良くなっていった時代ですね。

杉本義隆：だんだん景気良くなって養蚕に力を入れるようになったのね。田んぼは田んぼでちゃんと作っていたけども、田んぼだけいつもやっている訳ではないから養蚕を大々的にやりました。高等学校 1 年の時には、一人前に手伝っていた。

ー高校卒業後も、お父さま、お母さまとご一緒に養蚕をやっておられたのですか。

杉本義隆：はい。昔は丸いわらだに蚕を飼育していましたが、手間がかかるため飼育の仕方を 1 段飼育、2 段飼育と別々に行いました。既存の建物は飼育量が増える度に増やしていった建物です。それで補いきれないところは、庭にビニール掛けて屋根に担いだ経験もあります。

ーお 2 人がご結婚なさったのはいつごろですか。

杉本義隆：昭和 38（1963）年。

ーミツイさんも小高のご出身ですか。

杉本ミツイ：小高のすぐ隣の原町です。

ー杉本さんご自身が野馬追に初めて参加なさったのはいつ頃ですか。

杉本義隆：自分が中学校2年の時でした。うちの父も野馬追に出ていたもんだから。野馬追は3日間あって、3日目の野馬懸祭の途中からと、追い込みで出馬していました。それと、普通の野馬追とは別で、臨時野馬追といったものもやっていました。

ー初めて野馬追に出た時はどんな気持ちでしたか。

杉本義隆：私もやっとこの年になったもんだな、と思った。中学2年の野馬懸だけ出してもらったり。親もそろそろやめたかったか何だか。でも、父親も元気はよかった。

野馬追っていうと1年間のうちで一番楽しみだったの。お正月、お盆より楽しみにして。だから、野馬追に出られてうれしかった。けれど、怖かった。みんな大人に混ざって、こんなちんけな中学生の子らが（出たんだから）。私の時は中学生、子どもいなかったから。だから、野馬追の年上の人たちがどんどんやめていくと、役付きで上さ上がるの早かったの、私は。軍者以上の役職を三十何年やった。

ー野馬追を見ていると、やっている時は皆さん荒々しいですね。

杉本義隆：元気よくなるもんな。

原田みゆき：震災前はもっと元気よかった感じがします。お酒も普通に振る舞ってたので。だから、ずっと行列の間でお酒を飲んできて、逆に喉渴き過ぎちゃって、「すみません、水をお願いします」なんていう方もいらっしゃいました。

ー野馬追に参加なさったのはお父様の代からですか。

杉本義隆：はい。

ーどうしてお父様の代から野馬追に参加するようになったんですか。

杉本義隆：野馬追っていうのはこの地方で千と八十年くらい続くんですけども、私が思うに、やっぱり父親が馬が好きだからじゃねえべかな。たまに飯館とかで馬の競りをやっていたわけだが、そういう日にその場所に行って、お手打ち馬（優良馬）、いわゆる、その競りに出た中で1位になったいい馬を買ってきたようです。

その時代は車も何もないから、みんな行く時も歩き、帰りも歩きで買ってきていた。

ー農業で使う馬とはまた別の馬で出馬されていたのですか。

杉本義隆：いや、農耕馬で出馬してたんです。今でこそ野馬追は、サラブレッドとかアラブとかっていう種類の馬ですけども、元はみんな農耕馬です。

ーでは、普段はその馬で畑作業をしていたんですね。

杉本義隆：はい。畑、田んぼ耕して。あとは、山にたき木取りさ行ったり（運搬）、馬は必要だったの。

－杉本さんの家だけじゃなくて、他のお家も同じように農耕馬でしたか。

杉本義隆：そうです。

杉本ミツイ：牛で耕してた人もいたんでしょ？ 馬でなくて。

杉本義隆：いた。農家の規模の小さい方は牛でも間に合ったの。牛の場合は、1年に1頭ずつの子牛を売って、収入も増えたし。ただ、農業が大きいと牛では歩くのが遅いから、大きな畑や田んぼの能率上がらなくて駄目で、馬を買ったわけ。

－牛は子牛の出産で収入を得られますが、馬は子どもは産まなかったのですか。

杉本義隆：馬の子取りはほとんどしなかった。

－中学生の頃には追い込みに出られて、その頃は家に馬が1頭ですか。

杉本義隆：1頭。あと、馬と一緒に牛も置いた時ある。

－先ほどお話のあった「臨時野馬追」は、1日だけ小高神社でやるんですか。

杉本義隆：小高だけでやってた。甲冑競馬とかはやらないで。

原田みゆき：国鉄の旅行のプランみたいにな？

杉本義隆：そうそう。小高神社の禰宜さんたちが、野馬追の知名度を上げるために国鉄の人たちに話をかけて企画したの。お客さんたちには臨時列車で小高まで来てもらって、野馬追を見せたりしたの。それは禰宜さんから騎馬会に「出馬してください」って頼まれたから、7月の本番の野馬追とは別で一日設けて、年に一回ぐらいでやってた。

－臨時野馬追はいつ頃にやりましたか。

杉本義隆：寒いときだな。農閑期。向こうも農協の旅行とかで来るから。7月以外にもやってた。おらが中学校の頃だな。昭和20年代だ。

原田みゆき：結構続いていたの？ 毎年やってた？

杉本義隆：毎年ではない。2年にいっぺんくらいだ。それで途中でなくなったんだ。

－なくなったきっかけは何ですか。

杉本義隆：やっぱりお祭りより、だんだんとテレビも出てきたり、他の娯楽が出てきたから。

－杉本さんは小さい頃から馬は乗れたのですか。

杉本義隆：乗りました。子どもの頃から。小学校の2年、3年から乗っていました。

－中学生から追い込みに参加なさっていたとのことですが、行列や雲雀ヶ原へはいつ頃から参加されていましたか。また、その時はお父様と一緒にでしたか。

杉本義隆：昭和 32（1957）年から。7 月から、高校卒業したから今度は、3 日間。その時お父さんは私に譲ったの。その当時は（野馬追に出場するための）甲冑だの何かもなんぼもなかったから。1 軒さ 1 つあるだけ。2 つあるなんて家はほとんどなかったから。
今はもうなんぼでも（甲冑が）全国から集まってきて、売りだの貸すのだの（してるけど）、元々はなかったの。

－（部屋にある甲冑を指さして）この甲冑とはまた別ですか。

杉本義隆：この甲冑は父親が求めた。

－18 歳の時から乗られて、郷大将になられたのはおいくつの時ですか。

杉本義隆：50 代。

－それまでずっと毎年野馬追には出ていましたか。

杉本義隆：出た。野馬追っていうのは普通、一番最初は御使番、その次に中頭、組頭、勘定奉行、軍者。あとは侍大将、副軍師、郷大将となってるんだね。だんだん上に上がってく。

－年に一回とはいえ、位が上がっていくにつれ準備等が事前から大変ではなかったですか。

杉本義隆：本当に大変だ。仕事も大変だったから、野馬追の前の日まで仕事やって。養蚕やって、養蚕の蚕が小さいうちは山仕事やっていたんだよな。

－義隆さんがお仕事や野馬追でお忙しくなさってて、ご覧になっていたミツイさんはどう思われていましたか。

杉本ミツイ：忙しそうだ、気分良さそうだなって思いました。うちにいる人は大変です。

★家業がどれだけ忙しくても野馬追には必ず出ていた杉本家

杉本ミツイ：野馬追の時は養蚕で多忙な為、人を頼んで乗り切ってきました。

原田みゆき：養蚕って、野馬追がなくても本当に忙しいんです。1 ヶ月ごとに新しい蚕が来てまゆを出荷して、次の月にはまた新しい蚕が来て出荷しての繰り返しだから、もう野馬追の時期もとっても忙しいです。

杉本ミツイ：だから、大変でした。

原田みゆき：みんなフル出場です。子どももじい、ばあも、忙しい時はもうみんなでやらないと。その他にもお手伝いもいただいて、それでやっと成立する感じだったので。

どんどん規模が大きくなってきて。そっちの建物と、隣の建物の作業場も使ったし、2 階も使ったし。その後だんだん規模が大きくなったら、いま馬小屋になってるあの大きな建物が、1 階部分と 2 階部分を使って全部蚕です。ドーンと。

杉本義隆：年に 6、7 回ぐらい、多い時で二千八百何キロかまで取りました。昭和 42（1967）年に農林大臣賞を頂きました。

ー養蚕は卵を孵化させるのですか。

杉本義隆：蚕って蛾(カイコガ)なんです。蛾(カイコガ)が卵を産み付けて、孵化して蚕(幼虫)になる。一番最初は小さい蚕(幼虫)で、柔らかい桑を食わせてだんだん大きくなっていく。そして繭になって、また蛾が生まれてそして卵を産む、という仕組みなんです。

杉本ミツイ：昔おじいちゃんがここ(むろ)で寝起きして、夏蚕（なつご、初夏に孵化して飼われる蚕）と初冬蚕（しょうさん）は、おじいちゃんが1人でやったの。あと、共同で飼育所ってあったから、稚蚕飼育所でお世話になって育てました。その幼虫が成長したら出荷する。

ー出荷するまでにどれくらいかかるんですか。

杉本義隆：28～30日ぐらい。

原田みゆき：桑を食べてプクプクと太って大きくなってくると、今度糸を出すわけです。そうすると、そこに糸出したんでは繭が効率的に取れないので、今度は虫のアパートみたいなものがあるわけです。そこに全部移して、今度は虫たちが一つ一つの部屋(回転簇)に巣を作り始め、それが繭になるわけです。

ー温度管理もあるんですか。

杉本義隆：蚕小屋だったら25、26度を保つ。

杉本ミツイ：繭作る時は温度と湿度と風通しが重要。色が悪くなるから、純白になんないから。家族総出でやっていました。

ーミツイさんは、ご出身のお家でも養蚕をやってらしたのですか。

杉本ミツイ：やってなかったです。そもそも虫に触れなかったです。

ーみなさん養蚕ですっとお忙しいんですね。料理やお家のことは、手が空いてる方でやっていたのですか。

原田みゆき：私がいる時には私がやってましたけど、私が進学してからは弟がやってました。家事の時間も桑を切らないと追いつかないので。学校に行ってる間はお金がかかるので、教育資金を作るため、蚕の数量を減らすという考えは両親にはなかったですね。なるべく収入を得ようとしていたの、そうすると弟に頑張ってもらうしかない状況でした。

ー養蚕そのものはずっと長くやってらしたのですか。

原田みゆき：転機が、おじいちゃんが脳梗塞で倒れちゃって、亡くなったんです。(写真を指さしながら)あその真ん中におじいちゃんが。養蚕もう衰退してきたので、おじいちゃんが倒れた時点で全部やめて、借りていた畑は全部返したそうです。

杉本ミツイ：養蚕と稲作だけでは暮らせなかったんで、山仕事もしていたんです。木を切るでなくて、出すほうだけやっていました。切る人、出す人、運ぶ人がそれぞれいるんです。

－義隆さんはいつまで野馬追に出ておられたのですか。

杉本義隆：2010 年まで、57 年出てたな。その時までは弟と息子と 3 人で出ていた。弟は高校出てから埼玉の会社に就職したんですけれど、高校終わってから 11 年間は（野馬追の時に帰郷して）私の手伝いしとったの。「手伝ってばっかりいらんよ、私も出るよ」っていうことで出るようになった。

－野馬追に最後に参加された 2010 年の時は、どのような気持ちでしたか。

杉本義隆：最後はやっぱり寂しくなったな。けど、しょうがないなと思って。だから、郷大将をやめる時も、みんなうちの家内だの友達だの何から、「やめさせられてやめるより自分からやめたほうがいいよ」って言われて。郷大将 9 年だかやってやめちゃったな。

原田みゆき：たくさんの方がその後に控えているわけです。そうすると、上が抜けないと役も上がっていかないじゃないですか。「いつまでもやるよりも交代をしたほうがいい」って言いましたね。どの社会でも世代交代は必要です。

杉本義隆：野馬追に出て、5 年、10 年してくると、みんな上さ役が上がってくんだよ。下がつかえてるから、どんどん行ってパツてやめたの。57 年ぐらい参加したかな、何だかんだって。

原田みゆき：脳梗塞にならなかつたら、多分、今も功労者の役で出てたかな。

杉本ミツイ：出てたと思う。左が利かないから手綱を持てないので、参加できなくなったね。

★東日本大震災、福島第一原子力発電所事故後の避難生活

－2011 年の 3 月 11 日、地震が起きた時はどちらにいらっしゃいましたか。

杉本義隆：小高にいて、その時は山さ行って林業の仕事してた。ちょうどお墓がある山だったもんだから、目の前で墓石がバッタバタ倒れていくんだよ。これはただ事でないと思った。昔は、馬を使って伐採した木を山から運んでいたんだが、力仕事に不安を感じるようになってからは、馬のかわりに機械を使っていたんだ。その日も機械を使ってたから、機械を山に置いて家に来たら、馬小屋の中で馬 20 頭が大暴れ。馬を出そうとしても、いつ建物が潰れるのだから分かんないから中さ怖くて入れなかった。

その当時、長男がここで乗馬クラブを経営していて、馬の購入のためにヨーロッパに行っていて、飛行機が飛ばなくなってすぐ帰ってこれなくなってしまっ。

杉本ミツイ：3 日、4 日後ぐらいだな、帰ってきたの。

－建物は全部無事でしたか。

杉本義隆：瓦落ちただけ。

杉本ミツイ：瓦はちょっと落ちただけで。

原田みゆき：あちこち内部は壊れてるところはありながらも、取りあえず建ってはいられたので。

－原発事故による避難ではどこに避難されたのですか？

杉本義隆：震災があって 3 日、4 日目か。われわれも原発事故の為、避難指示がでて、川俣に行って川俣高校のグラウンドで一晩。私と家内と家内の母親連れて避難したもんだから。家内のお兄さんが

原町に勤めていたんだが、うちのこと心配でうちに戻った時、津波にのまれて亡くなっちゃって。そして、母親を預かって川俣高校のグラウンドに一晩。あと、個人のお家に二晩お世話になった。体の不自由な家内の母親が一緒な為、いつまでも個人のお宅にお世話になれないので、秩父の弟の所に電話して「今晚から世話になるから」って言って。

杉本ミツイ：1 カ月。

杉本義隆：1 カ月くらいいたのか、秩父の皆野町っていうところに。その後、秩父から香川県の琴平町っていう、金比羅さまで有名な町に移動したの。

杉本ミツイ：長男の知り合いで病院・介護施設を経営している方に「香川県に来ませんか、当院の施設にお母さんも入所できますし……」と言われて。言葉に甘えて、私の母と 3 人でお世話になりました。そして、そこでお世話になってるうち、この人（義隆さん）が脳梗塞になって。しゃべれなくて立てなくなってしまったんです。「歩けるようにして帰すから」って病院の院長先生がおっしゃって、リハビリを懸命にしてくださいました。

－脳梗塞になられたのはいつですか。

原田みゆき：2011 年の夏ぐらい。福島に戻る 1 日前です。

杉本ミツイ：そう。うちに帰るっていう前の日の朝に具合悪くなったの。服のボタンをかけられないって言うから「え？」と思って先生に電話したら、「じゃあ、救急病院に救急車で行きな」って言われて。本当に帰る前の日にね。

原田みゆき：その頃は南相馬でも、あちこちに仮設住宅も完備されて。申し込みをしてちゃんと借りられるようになって、「じゃあ帰りましょう」ってなって 1 日前に。向こうでも体を動かしてなかったわけではないんです。やっぱり体動かさなくなるといろいろな機能が衰えてきちゃうからってことで、この病院の先生がお仕事もお世話していただいて、施設の管理、草刈りをしたりとか、野菜を植えたりとか、そういう環境整備を 2 人で担当してやってたんですけど、それでもやっぱり調子悪くなっちゃって。

－知らない土地で暮らすのは大変でしたか。

杉本ミツイ：言葉も通じないことも多くて大変でした。

杉本義隆：方言を早口で言われたら、四国の人たちの言葉も分からなかった。

杉本ミツイ：うちの嫁さんは大阪だから「大阪弁みたいな感じだな」と。「私らが言ってること分かりますか？」って言ったら「全然分からん」って言われて。向こうでも「私らの言うこと分かりますか？」、「全然分からん」って言って笑ったけど、そんな感じで。言葉が通じないっていうのはちょっと大変でした。

－その後、福島に戻ってきたのはいつ頃でしたか。

杉本義隆：6 月下旬ごろ。2012 年の 6 月に。

杉本ミツイ：歩けるようになって。仮設にお世話になって。

杉本義隆：原町の仮設に住んでいたの。

－仮設住宅に住んでいたころ、小高に戻ってくることはありましたか。

杉本義隆：四国からはなかったな。立ち入り禁止だったんでね。ただ、埼玉に避難している時は、ここに一回来た。今度四国に行ったらなかなか帰れないから、様子を見に来ました。

杉本ミツイ：庭が草ボーボーで凄かったね。

杉本義隆：だって、家の周り全部草なんだもん。

杉本ミツイ：各要所、要所に警備する人が立っていて、「入っては駄目です」って言われた。そのあと、市から許可書もらって、立ち入りの作業服借りてきて来たんだよ。そして、山の刈り払いする鎌で庭を刈って。本当に背丈くらいありました。

－震災前、こちらで息子さんが馬のお仕事を始められてたんですか。

杉本ミツイ：息子が乗馬クラブやってたんで。30歳になってから小高に戻ってきて。

杉本義隆：平成7（1995）年の福島国体を境にこちらに戻って来ました。

－震災の前頃まで、その乗馬クラブで馬を20頭程飼っていた。

杉本ミツイ：そう。馬小屋がいっぱいだったもんね。地震の時、屋根が左右に大きく揺れたんです。建物が大きいからつぶれるかな、と思ったらずぶれなかったけど、すごかったです。馬がボーン、ボーンと小屋を蹴ったりいろいろするので、怖くて……。すごい動きでした。

－原発事故で避難になったとき、飼っていた馬はどんなさったのですか。

杉本ミツイ：息子がヨーロッパから帰ってきたら、千葉の知り合いの牧場に全頭避難。

杉本義隆：避難したね。

原田みゆき：両親は原発事故のイメージが湧かなかったようで、私はチェルノブイリの事故のイメージがあったので、爆発して被ばくしてしまうと思ったんです。「そのまま馬を置いて逃げたほうがいい」と両親に言っても「大丈夫、大丈夫」と安易に考えていましたが、説得して川俣に避難しました。

川俣に避難していた時、「外に出ないでください」と言われたんです。夜中の1、2時頃だったと思うんですけど、「皆さんここから出ないで、トイレに行くのもなるべく控えるように」と。

私は自分たちの命が最優先と思っていたんですが、両親はまず馬に餌を食べさせなきゃいけないって、川俣に行っても（小高の）馬小屋に通っていました。そのうち兄が帰ってくるだろうと待っていました。でも、震災直後、富岡から浪江町まで来るのに6時間かかると知り合いが言っていたので、（兄が）東京から戻るにはかなり時間を要する為、父は川俣から通って馬に餌を食べさせていました。

－川俣から小高に入ってたんですね。

原田みゆき：原町・川俣間の道は比較的大丈夫だったんです。114号線や小高より南の地域の道は通行困難な道が多かったです。

杉本ミツイ：ガソリンがあれば大丈夫でした。

―家にあった甲冑などは持ち出せたのですか。

杉本ミツイ：蔵に入ってたから、被害はなかったです。

原田みゆき：震災時、盗まれた方もいらっしゃいました。

―その時、乗馬クラブの馬は他の場所へ避難していたのですか。

杉本義隆：千葉県の乗馬クラブにお世話になりました。そして、馬は神奈川県伊勢原市で酪農を辞められた方がいて、牛舎を改築し、馬の運動場を作り移動しました。

―なるほど。では今は息子さんは、神奈川で乗馬クラブをされているのですか。

杉本義隆：やってる。

杉本ミツイ：じいちゃんの喜ぶ顔が見たいってということで、息子と孫2人で野馬追に出てんの。じいちゃんが死ぬまでは出るって言っております。

杉本義隆：息子と孫2人の3人が今出てるの。

―神奈川からいらして。

杉本ミツイ：ええ。

―今、お孫さんはいくつですか。

原田みゆき：25歳と28歳。

―小高に戻っていらしたのは避難指示が解除されて割とすぐでしたか。

杉本ミツイ：はい、すぐです。

―原発事故で、馬とも離れ離れになった時の心境はどうでしたか。

杉本義隆：寂しかったな。馬がいなくても馬小屋に自然と体が向いちゃうんだ。本当に家族も何もばらばらになって、大変なことだよな。だから原発事故がなかったら、そのまんま、うちの長男もここで家族みんなで、乗馬クラブも米づくりも何でも一緒にできたと思う。

―避難指示が解除になったら、すぐ小高に戻ろうと思っていたのですか。

杉本ミツイ：はい。あらゆる面で元の風景、生活に戻したかったです。

杉本義隆：あの時は、トラクターにキャビン付いてるやつで田んぼに入ったって、草で隠れて見えなかった。高い所で3メートルくらいまで草が伸びてたから。

原田みゆき：父は脳梗塞になって杖をついてたんですけど、トラクターは運転してたんです。

杉本義隆：トラクターは運転できた。

―大変な状況の中、ご自身で草刈りをしていたのですか。

杉本ミツイ：トラクターに乗って草刈りしてたね。

原田みゆき：復興組合ってのがあって、私も補助をしてました。農地を守るためにみんなで分担

して草刈りをしてくださっていました。お父さんもその中の1人で、一緒に草刈りをずっとしてたんです。最近では年取ってきたので自分の家の近くの農地だけ、草刈りをやってます。

杉本ミツイ：たまたまトラクターが無事で、家も修理は必要でしたがとりあえず住むことができたので、これが幸いでした。

－杉本さんご夫婦でお戻りになって、この地域（吉名）の人たちもすぐに戻ってきたのですか。

杉本義隆：2年くらいかかったね。

原田みゆき：この地域は珍しくて、避難指示解除後は、ここの地区だけみんな全戸いるんです。大概、他のところは全戸いるところはない。もう早い時期からここは皆さん、戻って来て住んでる地域です。

杉本ミツイ：家族的な雰囲気でも過ごさせてもらってます。

－仲がいいんですね、地域的に。

杉本義隆：いい。みんな畑いっても何しても声掛けていくんだ。

－素敵ですね。その吉名へ、杉本さんご夫婦が最初に戻ってきた。

ミツイ：ええ。

杉本義隆：私たちは早くから戻って。

原田みゆき：昔からずっと体動かしてきてるから、黙っていられなくて、小高に帰ってきていたようです。小高に帰ってくると自分たちが建てたものがきれいになってないと気になり手入れ始めて、ずっと続けてたんです。だから、しょっちゅう仮設から家に通って。寝る時には仮設に戻って。初めて小高の自宅の布団で寝た時、布団を干したのですがダニがいたらしく、体中がかゆくなったことがありました。

杉本ミツイ：治るまで時間かかりました。

杉本義隆：最初は分からなかった。やっぱり、家っていうのは人が住まないと駄目だな。

原田みゆき：バルサンたいた上に、布団をゴミ袋の中に入れてキンチョールやったそうです。若い人だったら、たぶん捨てるレベルだとは思うんですけど。ネズミも出てなかったの、布団を何とかして使おうと思ったらしく。今もまだ使ってるようです。

－虫やネズミ、そして動物に荒らされた家もありましたもんね。

原田みゆき：そうですね。

杉本義隆：窓ガラス割ってイノシシが家に入ったり。

原田みゆき：イノシシは家には入らなかったね。私の家では入りました。

－震災の後、初めて野馬追をご覧になったのはいつですか。

杉本ミツイ：仮設に入ってる時？

杉本義隆：だな。仮設に入って1年か2年してからだから。2014年ぐらいでねーか。

原田みゆき：欠かさず行ってたよね。

杉本義隆：行っていた。

原田みゆき：いつも山のとっぺん（雲雀ヶ原、観覧席の最上部）まで上がってます。

－雲雀ヶ原ですね。息子さんは震災後も出陣なさったのですか。

杉本義隆：2～3回は出てるかな。

原田みゆき：2年くらいは出ないでいたよね。でも、馬は運搬していたね。

杉本義隆：息子は商売で馬を持ってきて、皆さんに利用していただいていた。

原田みゆき：野馬追に出ないで馬を持ってくるだけが2年か3年続きました。兄は「野馬追に参加する」と言うと両親が喜ぶので、喜ばせるために、また参加し始めました。

－震災後、野馬追をご覧になった時はどのように思いましたか。

杉本義隆：小高の騎馬武者は、ほとんど名前を知ってるから、「あいつもうまくなったな」と思ってた。

杉本ミツイ：神旗争奪戦後の行列では、賞品身に付けて行列するから、行列見ると分かるの。「旗取ったんだな」ということ。

杉本義隆：神旗争奪戦でな。

杉本ミツイ：今年は孫が取ったんで、とてもうれしかった。

原田みゆき：父は目が悪いので、脇で解説してあげるんです。誰々が今走るよとか、旗を誰々がとったよとか。兄達3頭とも同じ旗印で神旗争奪戦に出ているんです。今年の野馬追では杉本家の旗印が羊腸の坂を上ってきたため大興奮で見えていました。父は参加できなくなりましたが、それなりに楽しんでいると思います。

★馬と野馬追への想い、これからの野馬追への展望

－杉本さんにとって馬はどのような存在ですか。

杉本義隆：馬がいない生活っていうことは考えられねーなと思ってやったな。ずっと。今でこそ、体が利かなくなったら馬はいなくなったけど、そのくらい馬は大事にしたし大事なものだ。

杉本ミツイ：お友達のような存在です。とても感謝しています。生活面でも馬に助けてもらって来ましたから。

杉本義隆：よく若い時は馬に乗ったし、野馬追にも参加した。馬に乗って木登りしないだけだった。何でも一緒に。家建てる時も、山から木材を出すのもみんな馬で引っ張っていった。

－高校生の頃、馬に対してどういう思いを抱いてましたか。

杉本義隆：高校の頃、学校から帰ってきたら、この辺の町の人たちは馬いない人たちもなんぼもいたから。馬使わない時は、その人たちと河川敷の堤防へ行って馬乗りだ。大体、遊ぶものがねーんだ。テレビはねーし、映画館さ行けば金がかかる。紙芝居ある時代だもん。紙芝居見るにも金がかかったから、こんなお金も何もねーんだから。1年間で小遣いもらえるのは、お祭りに10円か20円もらえる程度だから。だから、馬と遊ぶか、あとは他の学校の人たちとけんかするくらいしかなかったの。

これが楽しみだったな、また。

田んぼの中の道、馬乗って歩いてたの。だから、大事だったの。ここら辺の自分の家の山に行ったり何かするのも馬に乗って。

－野馬追に向けていつから準備をされていましたか。

杉本義隆：まず1月に臨時総会というのをやって、その年の役員を決めて、役付きが三役たちを決めた。そして、あと野馬追の前に三役のほか、軍者から勘定奉行、組頭、中頭、お使い番と決めたのが野馬追の1カ月くらい前に総会をやって決めた。

三役になっていくと、例えば標葉(しねは)郷の総会に招待になったり。あと反省会も総会なんかも標葉郷に行ったり、呼んだり。神社が同じだから、供奉(ぐぶ)するって形で。お互い郷として呼び合った。中ノ郷のほうとも昔は呼び合ってた。でも体がもたないからお互いに「やめっぺ」と、話し合った。

－野馬追って未成年であれば女性も出られるのですか。

杉本義隆：二十歳まで出れます。(※現在、緩和を検討中)

原田みゆき：でも私と弟は馬があんまり好きじゃなくて、野馬追には出なかった。

杉本義隆：長男は高校2年生から出てました。私は中学校2年で出たんですけど、息子は高校2年から。(一緒に乗せて)赤ちゃんの時は出てますけど。

－昨年まで7月開催ということもあり暑かったと思われそうですが、どうでしたか。

杉本義隆：去年までは7月で、去年も暑さで馬が亡くなったり、救急車で人もかなり(搬送されて)病院にお世話になったようだから。大変だな、やっぱり。

－今年から野馬追が5月開催に変わりましたが、その点についていかがですか。

杉本義隆：野馬追っていうのは、私ら出ていた時は7月11、12、13日とやってたんです。その後、23、24、25日と変わって、今年から初めて5月になって。人も馬も楽だと思う。だって本当に馬乗って、馬が倒れそうな時は分かるの、グラグラって。その時は馬にむち打ち、蹴り入れたり。そして、後は水は飲ませるし、味噌や梅を手拭いに入れて丸めて、馬にかませるんだ。

若い人たちにはそういうことも教えてます。馬を大事にしろと。自分の家の馬もいれば、馬を借りてきてる人たちもいるから。馬が死んだりすると、ただで済まなくなるから。野馬追というのは金もかかるし、だから、なるだけ怪我のないように。まず家族と同じく、馬も大事にしねーでは駄目だな。

－今後の野馬追はどうなっていくと思いますか。

杉本義隆：野馬追な。これからの野馬追はこのままで進むと思うけれど、頭数はだんだん少なくなってくると思うな。っていうのは、余りにも若い人たちがいないんだよな。

－参加したいという意志があれば野馬追に出られるんですか。

杉本義隆：基本的には誰でも出られる。ただ、女性の方だけは、未婚の20歳未満。その地区の野馬

追の保存会だの野馬追騎馬会っていうのがあって、騎馬会さ申し込んだら事務局に行くから、その人たちとお話すればいい。あとは、この会の幹部の人たちに言えば出馬できます。

杉本ミツイ：どうぞ出てください。

杉本義隆：あとは甲冑。甲冑は貸出しとるから。

杉本ミツイ：うちにもありますから。

原田みゆき：いろいろな相談を持ち掛けてですよね。そこから。

－野馬追の出陣式はどのようなものですか。

杉本義隆：郷大將でしたら私の付き軍者、組頭、中頭、お使い番。軍者の人たちがあいさつの仕方だの、若い人たちには、お使い番、初めてやるなんていう人には言葉遣いだの何かを教えるの。「本日の野馬追おめでとうございます。3日間お供いたします。本日の、ことしの野馬追、本当におめでとうございます」と言っただけ。

その後は家ごとで飲む。例えば、私だったら今年は軍者になった、侍大將になったっていうと、前日、大体1週間、10日前から出陣式っていうのを各地区でやってるんです。そして、誰呼ぶっていうことでなく、来たい人はみんな来いって。もう大騒ぎやって。

杉本ミツイ：ある程度、呼んでるよな。

杉本義隆：ある程度、幹部たちな。

杉本ミツイ：幹部と、あと親戚もだから。

杉本義隆：家族は大変だったの。今考えてみると。

原田みゆき：震災前まではね。

杉本義隆：そんなの当たり前だと思ってたから、私らは。

原田みゆき：震災前まではそういうふうに皆さんやってたんです。

杉本ミツイ：だからテーブルが蔵にいっぱいあるんです。お粗末だけど。

原田みゆき：そのお祭りまでベロベロですよ、毎日ですから。あっちの家、こっちの家。皆さん、お酒持って行ってたんです。

杉本義隆：そうやって友達も大事にして。

－出陣式というのは1日だけではなかったのですか。

杉本義隆：各郷の出陣式の他に個人での出陣式があったね。

杉本ミツイ：杉本家の出陣式に最高で70人来たこともありました。だから、いろんな道具を70人前そろえてあります。

原田みゆき：70人って1回にみんな70人来るんじゃないんですよ。まず30人くらい。そのうち、ちょっと帰ったかと思ったら、また来て、また帰って、みたいな感じなんですよ。

杉本ミツイ：最後の頃はずっと来たな。だからテーブル全部出したりして。八つあるの。そして仏様（仏壇）の前まで、座敷二つと、ふすま取って、玄関入ったところとか、テーブル並べて70人だった。

杉本ミツイ：50そろえてあったの足りなくて、あと20人分足して。

原田みゆき：料理は自分たちで作る時もあるし、あとはもうオードブル頼んだり、お寿司頼んだりと

か。疲れて次の年は作らずに、そういうのを頼んだり。ちょっと元気があるときには作ったり。



★ヤギとの出会い

ーお庭にいたヤギはいつ頃から飼われ始めたのですか。

原田みゆき：今年の4月末ごろです。馬が亡くなったのが4月2日だったので。ヤギは前からお願いしてて、たまたまヤギが2月に生まれて、普通の飼料を食べるようになった時点で連れてきてくれたという感じです。

ーヤギを飼うのは初めてですか。

杉本義隆：私らが小さいとき、ミルクで私らが栄養とるためにいた。ヤギは、草でも何でも少しあればいいんだから、飼うのは楽だった。でも、ジャガイモでもカボチャでも何でも与えてたけど、食べないんだよ。

杉本ミツイ：お馬さんの方が扱いが楽な感じがします。

原田みゆき：ヤギはせわしないです。子ヤギだからなのかもしれませんが、予測不可能な動きをするので、放牧からリードをつけてヤギ小屋に連れて帰ってくるもののリードが足に絡まっちゃって、こちらが転倒しちゃうんです。だから、年寄りには危なくて。

杉本ミツイ：私何回も転倒してんだ。シャーッと行かれると転ぶ。すごい力なの。

原田みゆき：馬は馬で蹴られて、どこかの女子高生が頭を蹴られたというニュースがありましたね。家にいた馬は、年寄り馬だったから大丈夫でしたが。

杉本ミツイ：（飾ってある馬の写真を指しながら）あのお馬さんなんです。白いの。

ーとても綺麗なお馬さんですね。

杉本ミツイ：大きなお馬さんで、イタリア生まれ。何年か前に野馬追に出るために貸したとき一番立派だって言われた。この馬に息子が初めて乗ったんだったべ。あとは貸してたから。

ーそうなんですね。今日は色々とお話を伺い、ありがとうございました。

杉本ミツイ：皆さんの、若い人たちの顔見せていただいて、本当に今日はありがとうございました。

【学生の感想】

福島県に生まれ、福島を身近に感じてきた私ですが、杉本さんのお話を聞く中で、自分の無知さに気づかされました。震災が起きてから、原発で起きたことや避難指示の場所については、むらの大学 I で学んできました。しかし、座学では得られない小高という地域の温かみに触れ、杉本さんが経験されたこと、その時に杉本さんがどう感じていたか、などは実際に足を運んだからこそ聞ける話でした。アーカイブ作成を通して、単なるインタビューを超えた、自分事として震災を考える貴重な経験を得ることができました。同世代の方々も、同世代でない方々も、震災について学び、その学んだことを誰かに話したり発信するだけでも、復興への近道となるかもしれません。ぜひ、このアーカイブから感じたことや得られたことを共有してください。震災から得られる教訓が次世代に引き継がれることを願っています。

人間発達文化学類 1 年 高橋 寧

福島県外出身であるため、震災や原発事故に関するニュースを見ても自分には関係がないと他人事のように捉えていました。しかし、今回村の大学で杉本さん一家に話を聞いて、自分の想像を超える当時の壮絶さに言葉を失い、自分の無知と申し訳なさを感じました。それでも杉本さんをはじめ、小高の地域の方々が頑張っている姿を見て、私も何かできないかと思い、アーカイブの作成に取り組みました。アーカイブを一人でも多くの方に届けることが、今の私にできることだと考えました。確かに復興は進んでいますが、廃炉は進まず、様々な課題に直面しています。このアーカイブを福島県の方や私の地元の人だけに限らず、より多くの人々に届け、これからの廃炉問題を日本全体の問題として考えてもらえるように発信し続けていきたいと思います。

行政政策学類 1 年 神長 澤

杉本さんたちの体験をインタビューする中で、私は、これまであまり馴染みのなかった小高（南相馬）の野馬追を徐々に身近に感じながら活動を進めることができたと感じています。また、自分たちの世代から薄れつつある震災の記憶と震災前後で変わりゆく小高の状況を、杉本さんと馬に関するお話を中心に知ることができました。加えてそれは、インタビューを通じて杉本さんの経験を伺うだけ

でなく、実際に現地を訪れ、町を歩き、飲食店に立ち寄ることで、より実感を伴うものとなりました。その過程で、震災は「終わった過去の出来事」ではなく、今なお人々の生活に多方面で影響を与え続けている現実を改めて認識しました。このインタビューを通じて、読んでくださる方々にもその現実を断片的にでも感じ取っていただけたら幸いです。そして、私自身も今後、震災に関する活動を通じて、この記憶の継承に少しでも貢献していければと考えています。

経済経営学類 1 年 石井 一吉

杉本さんのお話を聞いて、昔は馬と一緒に作業をしたり遊んだりすることが多く、馬が家族の一員のように感じられていたということが印象的でした。川俣に避難されていた際には、外に出ることが難しい状況でも馬の餌を優先されていたというお話や、避難先でも自然と馬の居る方向に体が向いてしまう、といったお話しから杉本さんの馬への深い愛情を感じました。現在では、さまざまな機械化が進んだことで、動物が生活の一部として身近にいる人は少なくなりましたが、杉本さんのような動物への思いを私も見習いたいと思いました。また、それと同時に、馬と関わる文化である野馬追いに積極的に参加し、この素晴らしい伝統文化を次の世代に受け継いでいきたいと感じました。

食農学類 1 年 小沢 駿介